抜文

本文抜文
「少女革命ウテナの言葉　《卵の殻を破らねば、ひな鳥は生まれずに死んでいく。世界の殻を破らねば、我々は生まれずに死んでいく》　(略)　神聖かまってちゃんは突如現れた。ネットをしょってやってきた。(略)　往年のロックバンドが何年もかけて積み上げてリスナーと共有していく物語を神聖かまってちゃんはわずか数年で達した。物語の量は価値だ。」

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！
これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。
音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、少女革命ウテナを軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

少女革命ウテナと神聖かまってちゃん

世界を革命する物語

世界を革命する、と聞いて「ばかじゃないの？」と思えるならすぐ次のページをめくって、好きなバンドの記事を読んだほうがいい。もっとも、この記事を読む人に速攻で捨てられるかもしれない記事なわけで、こんなことを書いてもしょうがないのだけれど。スタッフに同士が紛れこんでいると信じて書く。

「基本的に世界を変えたいとか革命したいという感情は健全なものなんだよ。一連の宗教事件なんかでさ、わりとこういうことが気分の悪いことだみたいに喧伝されているけど、実はそうじゃない。生まれたときから他人に決められたルールを無自覚に受け容れる方がどうかしてるよね。」と少女革命ウテナ、セーラームーンRを手がけた幾原邦彦監督はインタビューで答えている。↓

↓

九七年に放送された

『少女革命ウテナ』とは九七年にテレビ放映された衝突と破壊のアニメである。奇抜な映像、斬新な演出、ロマンチックなのにシュール、それまで見たことがないビジュアル表現は衝撃的という言葉意外に言い表せられない。アニメなのに描かない。アニメなのに動かない。アニメなのに分からせようとしない。製作スタッフすらきっといままで観たことがないアニメだったと思う。

　少女革命ウテナに関して有名な逸話がある。↓

　少女革命ウテナに関して有名な逸話がある。少女マンガ家がキャラクター原案を務めているため、スタッフはそのロマンチックな絵の作風に合わせて、宝塚歌劇団のような優雅で可憐な作品のイメージでスタッフは考えていた。
そんな折り、監督の幾原邦彦は突然、J・A・シーザーの合唱曲を持ってきた。六〇年代アングラ演劇を代表する天井桟敷（代表：寺山修司）の音楽を手がけ、その後は演劇実験室・万有引力を立ち上げた演劇人の曲だ。プログレが呪術的になったような曲調に、変拍子のリズム。観念的な、「絶対運命黙示録」「天然同胞宮殿遠近法の書」といった聞いたことのない言葉の羅列によってできた歌詞。戸惑っているスタッフに幾原監督は「いいだろう？　これが『ウテナ』なんだ」と言ったという。まつ毛バッサーのきらびやかな少女マンガ世界に、J・A・シーザーの幻惑的なアングラ演劇の二つを合わせることが『ウテナ』の始まりだった。↓

物語も異質だ。舞台は全寮制で外界から分け隔てられたような学園である。そこでは「世界の果て」という所から手紙で指令をもらい、生徒会メンバー同士が闘っていた。決闘に勝利して「薔薇の花嫁」と呼ばれる者と結ばれれば世界を革命する力が手に入ると言われている。主人公のウテナは王子様に憧れて自分も王子様になりたいと願って、男装して学校に通う少女だ。ウテナはその謎の闘いに巻き込まれる。

登場人物たちは自分の願いのために戦う。例えば、生徒会メンバー達。幼少期に感じた「輝くもの」を失い、その残像から抜け出せない者。立場の違いから己の気持ちが届くはずがないと決めつけ、この世の奇跡全てを否定したい者。永遠の友情や愛を求め、変わりゆく人の心が許せない者。彼ら（彼女ら）が求めるものは大きすぎて、待っていてもきっと与えてはもらえないものだ。日に日にその思いは募り、閉塞感を増していく。だから闘うしかない。辛い闘いを続ける事がないように。世界を革命するために。

　劇中、印象的なセリフでキャラクターの闘いの思いが描かれる。なかでも、各話戦いのシーンになるたびに必ず登場する言葉がある。

「卵の殻を破らねば、ひな鳥は生まれずに死んでいく。我らがひなで、卵は世界だ。世界の殻を破らねば、我々は生まれずに死んでいく。世界の殻を破壊せよ。世界を革命するために」

「卵の殻を破らねば、ひな鳥は生まれずに死んでいく。我らがひなで、卵は世界だ。世界の殻を破らねば、我々は生まれずに死んでいく。世界の殻を破壊せよ。世界を革命するために」

　何度も反復されるこの言葉はまるで視聴者に訴えているようであった。それは、物語の主軸にいる主要人物だけでなく、脇にいる人物たちも闘いに参加する話があるからだ。さまざまな苦悩の形が描かれ、決闘へと足を運ぶ姿が描かれていた。「世界を変えたい」という思いが誰にでもあると、幾原監督が感じていたからだと思う。そうしないと世界を革命する物語はある一部の人間たちに許された行動だということになっていた。
　このアニメを観ていて、登場人物のセリフでどこかしら自分自身に通じる部分を見つけてぼくはドキリとした。世界を変えたいという気持ちは抑圧されるべきものではなくて、人として当然に思う感情だったことが少女革命ウテナを見て分かった。既存にある何かを変えたいと思ったらそれはもう世界と戦うと言ってしまっていい。

JAPAN読者はロックンロールに世界を塗り替えられた人間だ。↓

JAPAN読者はロックンロールに世界を塗り替えられた人間だ。それは、自分のいた世界以外にも世界を見つけたということである。自分の知らなかった感情、感じてたけど言葉にできなかった感情をロックバンドやミュージシャンは示してくれる。強度のある音楽は、批評性がどれだけあるか、エッジさがどれだけあるか、世界を革命する気があるかどうかにかかってる。

神聖かまってちゃんは突如現れた。ネットをしょってやってきた。↓

神聖かまってちゃんは突如現れた。ネットをしょってやってきた。

ゼロ年代後半、オリコンという既存の戦いの場が壊れ始めたとき、インターネットに書かれている事をそれぞれが各自のリテラシーで信じなければいけなくなった。音楽の価値の捏造が始まった。とはいえ、本来は音楽の価値は聴いてみて自分しか決めることができないので、他人が書いた音楽の記事を読むことは価値を捏造している捏造記事を受け取ってることになる。いや、そもそも、批評とは「価値の捏造」である。どれだけ物語を作るかだ。例えば、甲本ヒロトは楽曲の製作について詳しく語らない。こういうことがあって、そのときこう思ったので、こう作りました、と言わない。生きてて呼吸してたらできました、くらいの言葉で片付けてしまう。

だから、リスナーは考える。この楽曲には日本の社会的出来事とリンクするところがあるぞ、なんて真面目に考察する。それが密度を増して膨大に溜まると物語になり、価値になる。これがもし、最初から楽曲製作について経緯を説明してたらどうか。「この曲は、歩道を歩いてたら水たまりに足つかってしまって、身体は暑いのに足だけ冷たくて嫌な気持ちだったから、こんな歌詞です」なんて言われたら、そこで終わりである。真実だが、それでは物語は積まれない。真実に劇的な物語が備わっていることもあるだろう。だが、それだと読み込める物語はそのひとつしか生まれようがない。真実が明かされないならどんな批評だって正解も間違えもない。

真実が明かされいならどんな批評だって正解も間違えもない。批評は「価値の捏造」と先ほど書いたが、これらの事からそれはネガティブな意味でないことが分かると思う。言いかえるなら「価値を作ること」である。

例えばアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』が伝説的になってる要因もそこだ。

テレビ放映当時から莫大な量の批評を生んだからだ。批評は物語を生み、それが数になると値価になる。物語を多く持っているモノが価値が出て現代では影響力が出る。オリコンという数字の価値軸が壊れきってるから。なので、若いロックバンドは古いロックバンドよりも不利だ。物語の量で勝てないからだ。いま若いロックバンドは不利なルールで戦わされているのだ。
もう世界を革命することはできないのかと思った。

オリコンが物語を作れなくなって代わりに機能したのはインターネットである。
それを使って既存の戦いのルールを書き換えるしかない。
そこで現れたのが神聖かまってちゃんだ。彼らにはインターネットに膨大に積まれた自身の配信映像があった。
無論それをすべて見るのは今から不可能(恐ろしい労力がかかるため)。だが、それらを視聴しているリスナーがいる。往年のロックバンドが何年もかけて積み上げてリスナーと共有していく物語を神聖かまってちゃんはわずか数年で達したうえ追い抜いてる。

物語の量は価値だ。
の子のおこなった批評（価値を作る）はインターネットを使うことだった。

彼らの楽曲『夕方のピアノ』は古い価値基準を持ち続けている日本の音楽業界に「死ね」と告げて、新時代の到来を思う革命の歌のように聞こえる。

《死ねよ佐藤》　作詞・作曲：の子

死ねよ佐藤おまえのために　死ねよ佐藤きさまのために
おまえはいつでもやってくる　しらない嘘をついて
死ね 死ね

死ねよ佐藤おまえのために　おまえがおまえでなくなるために
日々の中に行くたびに　　お前を殺したい
死ね 死ね死ね,死ね,死ね　お前のために
死ね死ね死ね　　だから想像するために

ぼくが死んだから想像するために　　ぼくのそのために
お前は死ぬべきさ　やっぱ
死ねよ佐藤　死ねよ佐藤　死ねよ佐藤
ぼくのために
死ねよ佐藤　死ねよ佐藤　死ねよ佐藤
ぼくのために

死ねー！死ねー！
ぼくも死ね
死ね　死ねー！！
まじで　死ねよ佐藤
死ねよ佐藤　ぼくのぼくがぼくのためにさ
死ねよ佐藤　お願いだからぼくのためにさ

　配信をリスナーと共有して、物語を積み上げ、往年のロックバンドに負けない価値を作る。彼らは勝ちに行ってると思う。耐用年数のとっくに過ぎたオリコンやマスコミ価値基準でまだ動いている音楽業界にインターネットの価値基準をしょって殴り込みに行ったからだ。

　少女革命ウテナの言葉を借りるなら、「卵の殻を破らねば、ひな鳥は生まれずに死んでいく。世界の殻を破らねば、我々は生まれずに死んでいく」それを自覚的に思っていたのがの子だと考えられる。

世界を革命するとは大それたことではない。自分が生きたい世界、それができる世界にいたいという思い。そうするにはいまある世界を自分の世界に書きかえるしかない。自分の世界にするために。自分が生きるために。世界に戦いを挑まなければならない。世界の殻を破らねば、我々は生まれずに死んでいくからだ。

そう考えると、彼らの楽曲『夕方のピアノ』は古い価値基準を持ち続けている日本の音楽業界に「死ね」と告げて、新時代の到来を思う革命の歌のように聞こえる。↓

《死ねよ佐藤》　作詞・作曲：の子

死ねよ佐藤おまえのために　死ねよ佐藤きさまのために
おまえはいつでもやってくる　しらない嘘をついて
死ね 死ね
死ねよ佐藤おまえのために　おまえがおまえでなくなるために
日々の中に行くたびに　　お前を殺したい
死ね 死ね死ね,死ね,死ね　お前のために
死ね死ね死ね　　だから想像するために
ぼくが死んだから想像するために　　ぼくのそのために
お前は死ぬべきさ　やっぱ
死ねよ佐藤　死ねよ佐藤　死ねよ佐藤　ぼくのために
死ねよ佐藤　死ねよ佐藤　死ねよ佐藤　ぼくのために

死ねー！死ねー！　ぼくも死ね
死ね　死ねー！！　まじで　死ねよ佐藤
死ねよ佐藤　ぼくのぼくがぼくのためにさ
死ねよ佐藤　お願いだからぼくのためにさ

うおお

神聖かまってちゃんと少女革命ウテナ

http://p.booklog.jp/book/82121

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/82121

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ